

会員みなさまの紹介・・・近江舞子しょうぶ苑（大津市）

- ◇ フリースペース「アイリス」の2年
- ◇ 注意事項とルール
- ◇ 子どもと大人の成長。そして、これから・・・。

平成28年2月から始まった「フリースペース アイリス」。

この2月で開設から2年が経過します。その後の子どもたちや私たちの変化などをレポートします。

フリースペース アイリスは、子どもを「孤立させない・孤立を防ぐ」ことを目的に、地域の資源や人がチームとなり、特別養護老人ホームという施設の特徴を生かし、子どもたちの夜の居場所作りのお手伝いできれば・・・という思いで平成28年2月からスタートしました。

毎週木曜日の午後17時～20時、これはスタートから変わらず継続、現在は小学4年生1名、小学5年生1名がやってきます。アイリスでたくさん遊びたいからと、その日の宿題は、学校で迎えを待っている間に終わらせているそうです。



活動内容は、夕食（しょうぶ苑の入居者に提供している物と同じメニュー）を食べ、入浴（しょうぶ苑の入居者が昼間に利用している浴室を利用）し、その合間に、いろいろなゲームや工作をしたり、一緒にテレビを見たりしています。それ以外にも、季節のイベント（誕生会・夏のお楽しみ会・ハロウィン・クリスマスなど）を子どもと一緒に企画し、楽しい時間を過ごしています。

◆大人の注意事項とルール

携わる大人は、近江舞子しょうぶ苑の職員11名と地域のボランティア4名。子どもたちにとって安心して過ごせる心地よい居場所が提供できるよう、試行錯誤してきました。

送迎、遊び、夕食、入浴…。それぞれの大人がそれぞれの思いで関わりを持っていますが、2年の月日が流れる中で、関わる大人が増えたり入れ替わったりしたこともあり、それぞれの思いが一人歩きしがちになることもあったため、フリースペースを継続する上での方向性が同じになるように、みんなで相談し、ボランティアの注意事項とルールを取り決めました。

「フリースペース アイリス」 ボランティア注意事項



自分の思い込みで活動するのではなく、まず相手の立場に立って気持ちを尊重し相手が何を必要としているのかを考え活動することがボランティア活動の基本となります。

活動が単なる「自己満足」にならないよういつも心に留めておく必要があります。「こうした方がよい」というあなたの考えによる行為が、必ずしも施設や相手に歓迎されているとは限りません。生活のリズムやペースも人それぞれです。歓迎されない行為や話したくない話題もあるはずです。利用者の立場を考え、自己をコントロールできる態度が必要です。



活動を通して知り得た対象者に関する情報は個人のプライバシーです。絶対に第三者に漏れないように注意が必要です。信頼関係を築くには、秘密を守ることが重要です。信頼関係は、秘密を守ることによって得られるといっても過言ではありません。

フリースペースの活動に必要なこと、関係のないことを立ち入って聞くことは慎みましょう。活動中に個人情報を知ることがあるかもしれませんが、決して口外しないように秘密を厳守しましょう。自発的に始めるボランティア活動として、また相手がある活動として責任が伴います。



相手と約束した活動内容や時間、活動先での約束やルールは必ず守りましょう。



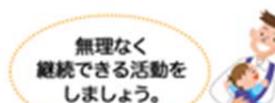
活動をすすめる中で様々な問題に直面することがあります。

問題に直面したら一人で悩まずに、管理人や子どもとかかわるワーカーに相談しましょう。



ボランティアは自分が気付いたこと、できることを、自分からやっけていく、自主的な活動です。「こうしたらもっといいな」と思ったことを提案しましょう。

また、自分の気づきを管理人や子どもとかかわるワーカーに話したり、記録にまとめたりすることで新たな「気づき」があるかもしれません。



自分の生活にあったペースで活動しましょう。

無理をしないことが長続きの秘訣です。

「フリースペース」という名の「おとなの遊び場」になっていないか？

子どもより大人の数が多くなることで、フリースペースが「おとなの遊び場」にならないように。大人の理想でオープンして、大人の都合で月に開催される頻度が決まっています、大人の都合で参加費が決まっています、大人の理想で良い子ちゃんが押し付けられる、やっている大人だけが充実感を感じている…。そんなフリースペースにならないように、時にはみんなで話し合い、子ども達へのより良い支援について考えて行きましょう。しかしながら、**大人も楽しみながら参加することは大切です。**

子どものために思うのであれば、子どもが本当に必要としているもの、子どもが本当にしたいことにもっと目や耳を向けていきましょう。子どもは言葉以外で、メッセージを発しています。子どものメッセージと向き合うことで、フリースペースという手段に終わらず、子どもたちへの支援としてさらに一歩先へ進むことができるのではないのでしょうか？

これから活動をはじめられる方も、すでに取り組まれている方も「自分の今いる地域で子どもに必要とされる場とは何か？」「自分たちも楽しく来て、子どものために自分たちができることは何か？」と一緒に繰り返し考えながら、子どもにもっと寄り添える社会の流れを共に作っていくことができればと思います。

★「フリースペースアイリス」でのルール

- ・「あそび」「学習」「交流」など…。「子どもが自ら選択し、決める」を大切に活動する。
- ・子どもたちの困っていること、つまづいていることに共感する。
- ・出来たことは賞賛する。
- ・あそびや関わりの中で、大人を介してや、物を介して関係が築けるように支援する。
- ・あそびなどで、小さな成功体験や感動を積み重ね、自分を大切にする気持ち(自己肯定感)を身につける。
- ・子どもを1人にしない。子どもと大人 1対1以上での関わりを持つ。
- ・活動時間を守る。(送迎時間・食事開始時間・入浴開始時間・終了時間)
- ・大人同士での言葉遣いに気をつける(名前の呼び方、話し方等)

◆ 子どもたちに伝えていくこと ◆

- ・挨拶をする
- ・待つ練習
- ・言葉遣い
- ・気持ちを言葉にする
- ・高齢者や大人、他人との場の共有(走らない、大きな声を出さない、喧嘩をしない、など)

あくまでもフリースペースの場所は老人福祉施設であり、お年寄りの方々が過ごす場所を借りていろいろな人の協力のもと開催出来ているということを、子どもたちはもちろんのこと、関わる大人たちも繰り返し言葉にし、認識する必要があります。

フリースペースでの活動が楽しい物であれば何をしても良いのではない、あくまでも入居されている方々に迷惑の掛かるような遊びはしてはいけない、ルールの中で楽しいと思える居場所づくりが大切です。

◆子どもたちの変化と私たちの変化

開始より2年のあいだに、子どもたちにも少しずつ変化がみられるようになりました。

- 苑に到着して、アイリスまで移動する間に会う他の人への「あいさつ」が少しずつ出来るようになった。
- はじめは1人で黙ってテレビを見ていたが、子どもから大人にいろいろと話しかけながら一緒にテレビを見るようになった。
- 最初は「はずかしい…」と1人ずつでしか入れなかったお風呂に、職員と兄弟一緒に3人で入浴出来るようになった。
- 職員との対応や会話の中にも、当初はあまり見られなかった「他の人への思いやりのこころ」もみられるようになった。
- 荒っぽい言葉遣いや、人に当たったり、喧嘩ごしの態度が無くなった。



たこ焼きパーティーの一コマ

「僕が作る！」「うまくひっくり返せるかな？」と、子どもから進んで参加します。入れる具材も子どもからの意見を尊重。イベント時は、多くのメンバーが集まるのでとても賑やかです。

このように、一週間のうちの3時間という短い時間でも、子どもたちに少しでも良い方向への変化が見られたことは、関わる大人にとっても嬉しいことです。

アイリスにはまとまった予算もなければ、子どもが楽しめる遊具もありません。何も無い中でも、子どもは考えて、いろいろな遊びを思いついて楽しんでいます。ボール遊びがしたくてもボールが無かった時には、風船にガムテープを巻いて、当たっても痛くないボールを作ってサッカーやドッジボールをしました。割り箸で輪ゴム鉄砲を作ったり、広告で紙飛行機を作ったりもしました。私たち大人が考えるよりも、子どもはもっと創造的。子どもたちの成長する姿を見て関わる私たちが柔軟に変化しないといけないと感じています。

◆卓球台とラケット

ある時、子どもたちから「卓球がしたい！」という要望が挙がり、台も道具も何も無かったので、はじめは会議室にあるテーブルを台にして、ネットはダンボールで手作り、ラケットとボールは百均で購入したもので遊んでいました。

そのうち、「もっとちゃんとしたラケットで卓球がしたい！」という気持ちになったので、寄付を呼びかけてみることにしました。しょうぶ苑の施設内に、子どもたち自身が募金箱を作って設置したところ、職員からはラケットの寄付があり、施設に来苑したボランティアがそれぞれの地域で呼びかけてくださったことで、近隣住民の方から卓球台を寄付していただくことが出来ました。今では毎週、本格的な卓球ができるようになり、毎週、どんどん上達して、腕を上げているところです。



卓球に熱中することと大人。会議用テーブルを使っでの卓球。ネットはダンボールで作りました。

難しかったサーブや打ち返しも、すぐにコツを掴んで速い球が打てるようになりました。

百円均一のラケットでは、カットや回転がかけられなかったなので、滑り止めシートを貼って、本来のラケットに少しでも近づける工夫なども考えました。だんだんとラリーが続くようになりましたが、テーブルの継目に球が落ちると、続かなくなるので、「ちゃんとした卓球台でもっと練習したい！」という思いがだんだんと強くなってきました。

「ダメもとで、みんなに寄付を募ってみる？」というメンバーからの提案に、「じゃあ、募金箱とポスターを作ろう！」と子どもたちが積極的に動き始めました。



卓球道具の寄付を募るチラシ

子どもたち自らが作成した寄付依頼



住民の方からご寄付いただいた卓球台。職員からラケットも集まり、本格的な卓球ができるようになりました。



作った紙飛行機を外で飛ばしました



普段の活動は3～4人の大人が関わりますが、イベント時は集まれるメンバーは全員集まります

来年は、子どもたちも5年生と6年生になります。彼らが成長していく中で、今後このアイリスがどのようなかたちになっていくのかは、今の時点ではまだわかりませんが、何歳になっても気軽に立寄ることが出来る居場所として、これからも継続していくことができれば・・・と願っています。